

ネット 漂流

狙われた子どもたち

Vol.69

投げ銭利用者から子どもから高齢者に



NET情報技術推進ネットワーク株式会社
篠原嘉一（しのはら・かいち）

コロナの影響もあり、非接触で支払える電子マネーの利用が増え、個人間でのお金の受け渡しもPayPayのようなスマホ型の支払い方法が一般的に利用されるようになった。

子どもたちは、お小遣いを電子マネーで貰うと、ゲームでもお買い物でも使え、保護者は記録から管理がしやすくなったのだが、友だちにお金をねだられるリスクも高くなっている。

「恐喝」とまではいかないまでも、お金の貸し借りから起きるトラブルを防ぐためにも、フィルタリングアプリを使用して、お金やアイテムを奪われないように保護者が管理しておいてもらいたい。わが子を信用しているのでフィルタリングアプリは不要と思っておられる家庭も多いのだが、わが子が友だちからスマホを勝手に使われないためのフィルタリングアプリなのだ。友だちと遊ぶときだけフィルタリングをONにするなどで、

余計なトラブルは回避できる。

子どものトラブルはフィルタリングアプリである程度防げるが、厄介なのが高齢者のスマホだ。電子マネー、LINEでの連絡、ワクチン接種証明等、高齢者もスマホが欠かせなくなってきた。これまで起きていた、マナー違反によるネットトラブルは子どもたちだったが、以前の中学生に起きていたトラブルと同じ内容で高齢者トラブルが増えている。SNSでの誤解を招くコメントからの喧嘩や、ネット上のコメントを鵜呑みにするトラブル。やはりネットの中を新聞記事やテレビの報道と同じように捉えてしまいやすいところから誤解が起きているようだ。

トラブルとはいえないのだが、使いこなしている高齢者にも心配な部分が見え出した。それは投げ銭機能だ。子どもの場合は、お小遣いの使い過ぎや知らない人とのつながり

からトラブルに発展してしまう心配だったが、高齢者が使う投げ銭は、自分の意思で支払っているのが問題はない。しかし、ネット上の様子を見ると、そこまでお金を使わなくても……と思ってしまう事例が増えてきた。

ライブ機能のあるアプリでは、出演者にコインやアイテムが投げ銭としてリアルタイムで渡せる。出演者は音声で話しかけてくれ、お礼も言ってくれるのだが、同時に複数の人がコメントをするので、どうしても煽られてより多くのお金を渡してしまう。温泉の劇場で役者におひねりを渡しているのと同じで、周りの盛り上がりからどんどんエスカレートしてしまう。YouTubeのスーパーチャット機能は1日に渡せる上限額が5万円と決められているが、アプリによっては制限がない。ユーザーが出演者に渡した額の半分ほどが運営側に渡るのだがライブ配信だと直接相手とテレビ電話をしている感覚なので、どうしてもめり込んでしまうようだ。これまでのテレビで芸能人をただ見ていただけの頃とは違う。コロナ禍でリモートが推奨されているのだから、現在に匹敵の仕組みなのだが、自宅にいながら毎日キャバクラで大金を渡しているとは家族は思ってもいないはずだ。金銭教育はどの世代にも必要なのだろう。